

言語地図集の理想を目ざして

(国立国語研究所『日本言語地図 第1集』に思う)

藤原与一

国立国語研究所の『日本言語地図 第1集』が出た。この機会に、書評の形式のもとで、言語地図集あるいは言語図巻の理想を考へ述べることができるのは、一研究者として、幸甚である。

(一) 言語地図批評は、資料批判から出発しなくてはならない。

浜田庄司氏、工芸品は第一に材料です。いい材料を得ることができれば、仕事はすでにもう半分すんだようなものです。(以下略)、『婦人之友』42年7月

言語地図で貴いのは、図の資料である。資料から、解釈の図ができるが、その、解釈図と言うべき言語地図が、技巧的によりのようによくできていようと、資料がたしかでなかったら、図の価値は低い。——言語地図批評では、資料批判が、その前半をなす。

研究所の過去の調査作業は、十カ年にわたり、六十人以上の人の(しかも地方研究員各位と研究所員諸氏と)によつてゐる。この結果が、言語地図で、項目ごとに、よこに一元的にとりあつかわれてゐる。ここには、大きな難点がある。地図資料の均質性においてである。

言語地図製作上、基本的に重視しなくてはならないのは、とりあへる資料の、徹底的な均質性である。(横断面上で、それらの資料を比較するのだからである。)この均質性を得るためには、広域調査も、年限すくなくすまことにしなくてはならない。作業員は、定められた合理的方法に忠実に順う、均質的な活動家たちであることが望ましい。となつて、調査員数には、おのずから、限度がみつめられることになる。私は思う。もし研究所が、ことのはじめに、いく人かを選び、その人たちを、調査者として理想的に訓練して、その、養成された均質的な人たちに、じゅうぶんな調査をしてもらつたらどうだつたらう、と。訓練に一カ年をかける。あと、五カ年で、全国の相当地点数を調査してもらつて。その結果は、貴いものではないか。

研究所の採つた調査手段は、私には考えられない冒険であつた。(——調査簿の内容、形式などのことにはおよばないで、調査作業そのことを、今は論じている。)調査に関する、いっさいの質的統一ということ、つねに厳格に考慮しなくてはならないのだと思う。資料から地図へ。私どもは、資料の性質によく順応して、資料を

地図にしないでならぬ。浜田庄司氏『よい材料をみつけ、その材料に合う手法で処理をする、それが大切なんです。そこに無理があったら、仕事の健康性を失います。』（承前）資料の段階が、わけでも重要だと思ふ。

(二) 言語地図には、ふしぎな魔力がある。

できた地図は、ふしぎな力を發揮する。すなわち地図は、地図以降のことをのみ人に考えしめるべく、人の心をとらえるのである。

地図が、今度の研究所の図のように美麗であると、人はこの美麗な図の完成感に打たれて、もはやそこから、「言語地理学成果」の批評をはじめ。知らず知らずのうちに、資料は絶対視されるのである。

——地図は、人をして、そうせしめる、ふしぎな力を持っている。地図製作では、この点に注意を向けることが肝要なのだと思う。

地図製作者は、資料の実質に忠実でなくてはならない。そうして、謙虚に、その実質を図上に投影することを考えなくてはならない。できれば、地図が読者にいつも根本の「資料」を考えさせるようにすべきである。製図の責任は大きい。

(三) 言語地図の具備すべき第一条件

見るによい図、見てすぐわかる図、直覚的効果の大きい図、これが、言語地図の第一条件である。

研究所の図は、じつに見よい。りっぱである。日本全域は、要領よく一枚の図葉に収められており、一図に整えられるべき必要事項の按配もよく、すべては見ごとにできている。

この地図が、そのつよい自立性を主張し、圧倒的な勢力をわれわれ

れに示すのも当然であろう。図を見る人は、図の前歴を問う心などはおこさない。

(四) 原図（言語地図に仕上げられる前の、もとの白地図）への要求

私は、以下に、言語地図の原図についての要求を出してみる。

言語地図は、方言の地理学的研究の所産である。地理学的研究であれば、図上、調査地点が明示されていることと、その地点々々の位置の相対関係が、実情さながらに出ていることが望ましい。したがって、地理学的研究の整理の方法としての言語地図製作では、第一に、原図の、ある大きさというものが、調査範囲と調査地点数とから、せんに要求される。私どもが現在、整理しつつある瀬戸内海言語調査では、各島につき、三十戸以上の部落（時にそのほかのもの）を、のこさず調査した（淡路島に多少の例外がある）ために、多くの調査地点が図上で密集することになり、ために、瀬戸内海域東部の、淡路島・小豆島を中心とする所だけでも、新聞紙一枚大の原図を要することになった。研究所の図は、全国図で、約新聞紙一枚大である。欲を言えば、図が小さすぎると言わなくてはならない。

一見、くわしくしらべられているようでも、この一枚で全国図である。ほんとうは、調査地点のあらぬ図である。それがそうは見えないところの問題があり、地図の魔力がある。地理学的研究の、地図の効果をねらう図としたら、もっと大きい図を作って、調査状況の全体を正確に反映せしめるべきではなかったか。

このままだと、全国をまんべんなく調べたようでもあるが、

じつさいには、山地帯など、どうであつたらう。——もし、各図ごとに、薄菜の地勢図が重ねあわされているならば、見るものは、ことさらに、正確に理解することができよう。地勢図を付けることが不可能な場合は、地理的条件のもとで調査地点の所在を理解しうる程度に、地図が大きくできており（——多少の河湖・山脈も印刷されており）、かつ、調査地点が示されているとよい。

研究所が、色の使用をやめて、その方の経費をまわしてでも、図の大きさを考慮したらよかつたのではないかと、わからないながらも、思うのである。

これの二倍大の図案にしたとする。そうすると、調査の地点々々を、地理的關係にしたがいながら、ある程度までよく示し得るのではないかと。——地図は「地の」図であることが本体である。

調査地点の明示を、かならずしも重視しない前例もある。私は、原則として調査地点は明示されるべきであると思ふし、原図に調査地点のなんらかの印が印刷されているのがよいと思ふ。製図の結果を見ても、地点に符号がなければ、「そこは問題の事象の分布がないのだ。」ということが、いかにも明らかである。

地点をおろそかにして符号をおけば、図はますます魔力を發揮する。

地点を印刷して、しかも、地点に通し番号をつけることがよいと、私は思う。研究所のは、個々の図では、図上に地点番号がない。これもひとくふうの結果ではあるが、常識的に言つて、つねにどの図にも、すぐに利用しうる地点番号があるのは、便利である。さてまた、研究所のは、地点の通し番号が、複雑な数になつてゐる。大所高所から、合理的な手順で設定したものはあるが、結果の、一部

を見た時は、たとえば対馬で、あいならば地点が、現に-16-68-84-62とというような番号を被つてゐる。これだけ見たところでは、合理的とも言えず、不便にも感じられる。実用的な長所を重んじる番号法もまた、たいせつなものではないか。

(五) 製図第一工程

ここで製図法の問題にはいり、製図のさいしよにおこなうべき事象整理を、製図の第一工程としてとりあげる。

調査項目がある。その項目に応じての、地点々々の調査成果がある。この個々の調査成果を方言事象とよぶ。各項目下で、所与の全方言事象をとりあつかつて、このとりさばきの結果を、原図上に、分布図化する。(多くは、事象の代表符号が用いられ、符号の分布図ができる。)

今言う全事象のとりさばきは、当の項目に関する現象全般の、解釈にはかならない。製図のすべてが、さまざまの解釈作業と見られるけれども、とりわけ、第一工程としての事象整理は、肝心な解釈作業である。同じ項目においても、人により、整備の相違が生じる。同一人でも、研究の深化にともない、事象整理が、段々に深まってくる。

事象整理法を、一般的法則に仕立てることができても、なおその上に、研究者個人の独創的な開拓が、つよく要望される。一項目下の諸事象の類別は、事情のゆるすかぎり、高い知見によるべきものである。もっとも、その高い知見に到達するがために、協同の研究活動を重んじることは、また別に重要である。

事象整理の根本方針としてたいせつなことは、整理類別されたも

のが、たがいによく対応関係を保つようにする、ということである。対比効果のくつきりとした分類案を得ることがだいじである。

分類を精密に考えれば、全事象を細分してうけとることにものなるう。はじめに細分が必要である。つぎにこれを適度にくくっていくことが必要になる。研究所の場合のように、多くの調査員を動かした作業結果では、適度にくくって、解釈の安全線を確保することが必要にもなるう。研究所の第1図は、「カガミ（鏡）の-Gの音」の図である。そこには[V]の発音が示されている。このような音を聞きわけたかたがたが、もしも他地域にも臨んだとしたら、他地域についても、[V]を報告されるのではなからうか。このような事態の予想される時、「カガミ」の発音に関する諸事象を、どう処理するかは、考えなくてはならないことである。安全度の高い解釈図を目ざすことが、一つの課題になる。

私どもは、瀬戸内海域の調査で、ずいぶんこまかく調査法をきめたつもりであった。しかし、均質的と思われる人たちの、それぞれに記してきた調査カードを見ると、たとえば「ワイ」という文末のことは、「知らんワイ。」「知らないわ。」など「の現実を表記したものにしても、「ワイ」「ウェイ」「ウェイ」などなどといったあんなばいであって、処理にこまるのである。こんなのを、どうくくってうけとめるのが、安全な解釈なのか、迷うのである。「確実な成果」の図にしたいと、考えなやむのである。

研究所が、第一集に、発音の図と形容詞の図とをまとめたのは、巧妙であった。発音の図は他に優先する。ついで、方言現象として興味ぶかい、形容詞の領野をとりあげたのである。（人はたいいてい、この種の領野に、さっそくの方言興味をおぼえる。）以後の全体に

対する、はじめの地図集として、第一集は、まことにかっこうの集成と言える。さてその形容詞の場合、調査項目に依じて出てくる形容詞が、地方ごとにさまざまである。これらを彙集して分類するとなつて、ことに用心しなくてはならないのは、形容詞の語義をじゅうぶんにおさえて語詞を分類することである。第34図に、「きなくさい（きな臭い）―前部分」がある。これの、質問文、は、布切れなどが火の中にはいると妙なにおいがします。どんなにおいがすると言いますか。である。これへの答が整理されて、当の形容詞の部分が、第34図にまとめられた。が、ここに、若干の疑問がないではない。凡例を見るのに、たとえば KINOBORI も KUSUBORI も、ともに出ている。しかし、所によつては、これらは、同列には存しない。すなわち両者は語義を異にするのである。私がさきごろ得た、岩手県下閉伊郡内の一例でも、「衣類のこげるにおいの時」は「ギ[ナク]サエー」であり、「薪類の燃えないでいぶっているにおい（火がついて、燃えてないで、ただケムだけ）」は「フ[ス]ブ[ウ]リ[ク]サエー」である。質問文を、布切れなど、としたのがわるかったかもしれない。（このの英訳は、smelling burnt, of cloth (first element) となつてゐる。）ともかく、意義に即して、地方形容詞を分類するしごとは、おもしろくてかつ、容易でないしごとである。事象整理のむずかしさ、安全線を目ざしてものをまとめるうえの困難、まとめたものとの対比関係をよくするうえの困難が、ここにある。

一項目下の全事象の整理の結果は、一枚の地図の上に、総合分布図になるよう、全部、載せることが、第一案として望まれる。これがたせない時は、図の一隅の凡例の個所で、そのことをことわる。

凡例は、調査事実全部の処理表であるようにしたい。——凡例内に、いろいろの形式の記述を設けて、調査結果の、凡例に載らないものはないようにするのである。このように、完全を目標として凡例をつくるのが、製図の第一工程のむすびになる。

一目目下の方言事象がおびただしく多ければ、図は、二枚以上にわたることになる。そういうさいの各図の凡例は、また、兄弟関係の他図をも見あわせた見地での好凡例であることが望ましい。

〔六〕 事象とその代表符号——配符法

事象を原図上に記すのに、代表符号を用いるとする。ここで、事象に符号を当てる配符法が問題になる。(じつは、配符の結果も凡例に載る。だから、凡例づくりは、さきに言う製図の第一工程だけのことにはとどまらないわけである。)

私は、製図に関しては配符がもっともだいじであると思う。見る図、見てもらう図は、符号の分布を見てもらうのである。見られる図の生命は、符号にある。簡単でない分布図では、要するに、符号対符号の全体相が、決定的にものを言う。

私は、配符法上、配符の地方的基準というものを考えてみたいのである。たとえば、中国地方方面に多く見えがちの分布事象には、○系統の符号を当てる。四国地方方面に多く見えがちの分布事象には、□系統の諸符号を当てる。近畿方面のものには△系符号を、九州方面のものには◇系符号を当てる。この基準ですてに若干の処理をしてみた。分布図上、符号の図形で、もう、どの地方にありがちな分布と、ことがきまっているのは、よいことではないか。図ごとに任意に()という、恣意的となる、興味本位などから、符号のあ

れこれを用いるのは、学問上、建設的とは言えない。図は、いく枚もが、かさねて見られる。かれこれが、対比して見られる。そうされてよく、そうされるべきなのが、「言語地図集」なるものである。となった時、施符法・配符法には、大所高所からの統一のあつてよいことがみとめられる。

こういう見地から、研究所の図のそれこれについて、観察を加えてみるのに、かならずしもうまくはいっていないことを発見する。

国の東部は何系統、西部は何系統と、符号の種別を大まかにきめておいたのでも、有意義なものではないか。製図してみても、配符の不適切なところを見いだしたら、改めて配符法を考え、図を作りなおす。

地方色を代弁させる符号群を設けるとともに、全般的分布を代弁させる符号、問題事象を代弁させる符号、いずれの分布とも、地方色をきめかねる諸種の分布を代弁させる符号などを、それぞれにきめる。これらによつて製図することは、煩雑にはならなくて、むしろ、現象をきれいに処理することになる。分布図の、どのような一図も、体系の中の一図として、つねに正しく位置せしめることを考えねばなるまい。それに応じて、各図の符号法が考慮されることになる。

事象整理の結果の事象分類表に見られる「事象と事象との対応関係」に、「その代表符号と代表符号との対応関係」が、ほどよく吻合することもまた重要である。事象上のへだたりは³だのに、代表符号上のへだたりは²でしかないというふいふことのないようにしたい。配符には、きわめて慎重な心づかいがある。こういう点、研究所の図の配符には、時に問題がある。

(七) 配符と配色

つきは配色である。配色と配符との組みあわせが、事象分類に対して、いかにも合理的であり得ているなら、その図の配色もまた成功である。色を、このように、必然性のみとめられるようにつかっていく。

研究所の図では、東系の分布が、A色で示されているかとおもうと、また、B色で示されてもいる。図によって、変差がある。一図々々を見れば、それとしての色彩図の妙味はよくわかり、美麗と嘆じるのもあるが、私案によれば、さきの符号の場合と同様、やはり、地方色を代弁させる色のとりきめ——基準設定——が欲しい。いつ見ても、うすぐらい所で見ても、不用意に見ても、Aの色は要するに東国色とでもきままっていると、読者は何かと判断しやすくして好都合である。全国的なものには緑色、ときまわっていてもよい。

符号に、色は、どういう時につかうか。白・黒では符号に限界があつて、もうなんともならぬという時、色をつかつてみてはと思う。厳格な言いかたをすれば、言語地図に色を用いるのは、じっさい容易ではないしごとと言へる。ただに興味本位でつかう場合は別である。

色に関してまた、二色以上に関する対応色の問題がある。研究所の図では、たとえばKA-系に赤色を用いて、SUMO-系に桃色を用いている。(第34図)この時、K-とS-との距離と、赤色と桃色との距離とは、よく吻合するか。色も、多色の運用となると、その対応関係の吟味に、ほねをもらなくてはならない。

色をつかうことをおさえてでも、図版の大きさに欲を出してはと前に述べた。発音の図など、白・黒でも、かなり見やすい図を製

することができたのではないか。白・黒に終始して、それで、言語地図の、品格ある鮮明さをねらうことも、興味のあることである。そして、その一定的な符号用法に、わかりやすい意味を持たせて、人の目を引くようにすることも、やって、興味ぶかいことである。

(八) 言語地図集の美しさについて

個々の図は、体系の部位において、それぞれに美しいことが要求される。一枚々々の図がばらばらに美しいのでは、最善でない。二枚以上の図のおおのが、組織下・統一で、全体の中の個として美しいのが、言語地図集の美しさというものである。

言語地図集は、かならずや、いつも、そのいく枚かが見とおされることを、——二枚以上が比較されることを、予定していよう。その予定を確実にふまえた製図がいる。製図の美をかもすことは、そういう自覚の中でおこなわれなくてはならない。

研究所の図集の場合、美しさは、第一次的のものかと思う。研究所の図を材料にして、体系・組織・統一を目ざしての新図を作ること、今は可能である。

(九) おわりに

研究所今回の第1集言語地図が、全図の体系の中で持つ意義については、何か言及されているであろうか。案内としては、それがあつてよかつたと思う。今後どういう順序であつたの図が作られているのか。予定一覧を、なお解説して下さることはありがたい。言語地図というものが、ことからのどういう順序にしたがって作られていくものなのか、その理想のすじ道の探究を示して下さることはあ

りがたい。多くの経験をつみかさねていく、長期のしごとの、発展性・発展的意義を、どの道の人も、知りたがっているであろう。

以上はしぜん、解説書についてのことになった。

私は、自分の実践内容をかえりみつつ、以上のことを申し述べた。(すでに拙著『方言学』で述べてあることも、ご参照いただければ幸である。)

製図と担当の各位には、すべてに、最高の努力をはらわれた。内外の学界を通じて、第一級の労作と称すべき作品を提出されたご努力は、まったく、敬服にたえない。そのご努力は、まさに正純なものだったと思われるのである。このさい、愚考のいくらかが、第2集以後に、なにはどなりとも、生かしていただけるならば、筆者の光栄、これにすぎるものはない。

かさねて、浜田庄司氏の至言を想いつつ、研究と担当各位のご発展を祈る。(42・8・5)

(国立国語研究所編『日本語地図』第1集 昭和四二年四月刊、言語地図(61cm×75cm)五〇葉、参考地図一葉、バインダー装、別冊解説二冊つき 大蔵省印刷局発行 定価七〇〇〇円)

— 広島大学教授 —